

現代スポーツの社会的意義と社会問題について

—青少年の健全育成及び体罰問題から考える—

和仁 ももこ

HS29-0073B

目次

- 第 1 章 社会の変化と現代スポーツ
- 第 2 章 スポーツの意義
- 第 3 章 青少年の健全な育成
- 第 4 章 部活動における体罰問題
- 第 5 章 身近な選手の経験から
- 第 6 章 解決策・今後に向けて

はじめに

本稿ではスポーツを単に身体活動としてとらえるのではなく、スポーツのもつ意義を社会学的な観点で検討する。具体的には、将来の社会を担う人材の育成として、「青少年の健全な育成」にスポーツはどう関わっているのかに焦点を当ててみていく。また、スポーツには意義が多々ある分、問題点も多く存在する。意義と合わせてスポーツにおける問題点についても考察するために、「部活動における体罰問題」に着目し体罰の実態、解決法を示す。

1 青少年の健全な育成

永井は、スポーツを通じて養成される能力としてまず「主体性」、「積極性」、「柔軟性」、「外向性」といった性質を挙げている。さらに、指導者からのアドバイスを受ける際には「傾聴力」と「課題解決スキル」が養われる(永井 2020:109-131)。加えて、ルールにそってスポーツを競技する過程では

「フェアプレー精神」を育てることができ、青少年の倫理的な成長も期待できる(公益財団法人日本スポーツ協会 web サイト; N-COPE web サイト)。

このようにスポーツは教育的意義を持ち、青少年の健全な育成に大きく関わっているのである。しかし、指導者は指導法を一步間違ってしまうと、「体罰」になってしまう。選手の育成に力が入りすぎるあまりに、体罰に頼った指導法を行っている指導者が多くいる。

2 身近な選手の経験から

2.1 調査の概要

専修大学女子卓球部 15 名を対象に、「体罰経験」と「体罰意識」について対面式半構造化の聞き取り調査を行い、具体的な経験の内容を聞き出し分析する。

2.2 調査結果

体罰経験の有無について聞くと 11 名が体罰経験者であった。中でも 4 名は走らされる、「アホ」等暴言を言われるといった経験があったのにも関わらず、これを体罰だとは認識していなかった。体罰を受けた際の競技への臨み方と内心の違いでは、「頑張るぞと言いつけさせていたが内心は嫌だった」という意見が 8 名から得られた。体罰を受けた際の競技への影響について聞くとマイ

ナス、プラスに働いたという回答がどちらも7名ずつから得られた。

2.3 調査結果による考察

まず、体罰経験の有無の回答から、「体罰＝暴力」という考えをもつ者が4票と多くいることが明らかになった。さらに、暴言やいわゆる罰走のような指導的な「罰」が体罰に含まれるということが、対象の選手たちには浸透していなかった。そして、体罰を受けた際に、「内心は嫌だった」と回答した者が8名であったことから、たとえ指導的な意図があったとしても選手に対する指導として不適切であると考えられる。

次に体罰が競技へプラスに影響する場合は、限定的であることが明らかになった。これは監督を意識してプレーすることで、結果的にプラスに影響しているだけであり、選手自身の成長にはつながらない。選手はプレーするにあたり「怒られないように」から「勝ちたい」と考えるようになるのが理想である。また、体罰を受けてきたから成長できたという意見も6名と多くから得られ、彼女たちは「理不尽な体罰はダメで理不尽ではない体罰は良い」と考えていた。「理不尽でない体罰なら良い」と調査対象者が認識していたことは否定できないが、体罰は法律でも禁止されているのでどのような体罰であろうとしてはいけないのである。実際に体罰未経験の者が受けていた指導には、選手が自分で考え行動する場をつくるというケースがあった。このように選手が主体のチームを作るのは体罰に頼らない、現代にふさわしい指導法であると考えられる。

3 結論

本稿では、スポーツの持つ意義を将来の社会を担う人材の育成として「青少年の健全な育成」に着目し調査した。結果としてスポーツは教育的意義を持っており、青少年はスポーツを通して様々な経験をし、成長することができる。

また、指導者が選手に体罰をした場合に、青少年の健全な育成への影響を考えると、「主体性」では、自ら考え判断することが重要だが、体罰により無理やりやらせても選手に主体性は身に着かない。「積極性」では、監督が怖いからと無難なプレーをしていては、選手に積極性は身に着かない。したがって、体罰はしてはいけないと考えられる。

体罰に頼らない指導者となるため、体罰未経験者の受けていた指導法にもあった、選手が主体で成り立っている環境を指導者は作り出さないといけないと考えられる。選手がスポーツをする中で様々な経験を通して成長していくように、指導者も体罰に頼らず選手を育てていけるよう、選手と共に成長し続けるということが重要である。

4 参考文献

- 公益財団法人日本スポーツ協会『スポーツ指導者のための論理ガイドライン』https://www.japansports.or.jp/Portals/0/data/katsudousuishin/doc/rinri_gideline_s.pdf（閲覧日:2020年10月16日）
- 永井洋一（2020）『子どもがスポーツをするときにこれだけは知っておきたい10の本質』徳間書店
- N-COPE, 日本体育大学『フェアプレイ教育を実践する！』https://www.nittai.ac.jp/incope/pdf/report_fairplay.pdf（閲覧日:2020年10月16日）